

水稻病害虫防除対策（8月）

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農薬登録情報提供システムホームページ（<https://pesticide.maff.go.jp/>）等で最新の登録内容を確認してください。（記載中の登録内容は令和3年8月1日現在）

1 いもち病（穂いもち）

- （1）7月下旬調査では、県内の葉いもちの発生ほ場割合や発生程度は全般的に平年より低い状況でした。
- （2）上位葉に葉いもちの発生が認められるほ場では、早急に散布剤による防除を行ってください。
- （3）散布剤で穂いもち防除を行う場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施して下さい。穂いもちが多発するおそれがある場合には、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- （4）飼料用米などで育苗箱施用剤や粒剤を施用していないほ場では、葉いもちが発生して近隣ほ場に感染するおそれがありますので適切に防除してください。
- （5）使用薬剤については、水稻病害虫防除対策（7月）表2を参照してください。

2 紋枯病

- （1）高温多湿が続くと上位葉鞘への進展が激しくなり、第3葉鞘以上の葉鞘に発病して葉が枯れると減収などに結びつきます。また、茎が弱くなり倒伏しやすくなります。
- （2）出穂後も高温多雨が続くときは、止葉葉鞘に上がり穂が枯れる恐れがあります。
- （3）多発の兆候が見られたら、穂揃い期に2回目の茎葉散布を行ってください。
- （4）使用薬剤については、水稻病害虫防除対策（7月）表4を参照してください。

3 ごま葉枯病

- （1）砂質土壌水田等では生育後半に肥料分が流亡し、肥料切れとなるため発生が多くなりやすい。そのため、深耕、堆きゅう肥の増施、客土、ケイカル施用等により地力の増進を図りましょう。
- （2）常発地では生育後期の肥料切れに注意してカリ肥料の分施を行ってください。
- （3）最高分げつ期頃から発病が見られ始め、穂ばらみ期頃から急激に進展します。出穂後は穂首や枝梗にも病斑を作りますが、いもち病のように白穂になることはありません。多発すると上位葉が枯れあがり、穂枯れ症状となって籾の充実が悪く、茶米などを生じ減収の要因となります。
- （4）穂枯れの発生が懸念される場合は、穂揃期と傾穂期に散布剤で防除を行ってください（表1）。

表1 ごま葉枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用量・濃度、 散布液量/10a	使用回数 の制限※
散布剤	アミスターエイト	アゾキシストロピン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回
	ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍 (140～150L)	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フサライド	I1			
	ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍 (140～150L)	2回以内
		フサライド	I1			

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・アゾキシストロピンを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)
- ・トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内)
- ・フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内

4 変色米

- （1）腹黒味（アルタナリア菌）は、玄米の腹側に黒褐色の病斑が見られ、夏期高温の年に発生が多くなります。
- （2）紅変米（エピコッカム菌）は、玄米の表面に紅色の斑点を生じます。出穂後低温で発生が目立ちます。
- （3）褐色米（カーブラリア菌）は、玄米の表面が褐色に黒褐色の微斑点を生じます。高温、乾燥、強風などで抵抗力の低下した稲にみられます。
- （4）適切な施肥を行い早期に枯れあがる管理は行わないでください。収穫後、速やかに乾燥調製を行ってください。

表2 変色米の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用量・濃度、 散布液量/10a	使用回数 の制限※	ナアル アタ	ツエビ カム	ラリー アブ
ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以 内			○
	フェリムゾン	U14						
ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	1,000倍 (140～150 L)	2回以 内			○
	フェリムゾン	U14						
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以 内		○	○
	フサライド	I 1						
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍 (140～150 L)	2回以 内	○	○	○
	フサライド	I 1						

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

・成分ごとの総使用回数については、表1を参照してください。

5 斑点米カメムシ類

- (1) 7月下旬の本田すくい取り調査では、発生地点割合は平年並でしたが、浜通りで発生程度の高いほ場がありました。
- (2) 本田すくい取り調査での種別ではホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメが多く、多くの地点ですくい取られました。特に、浜通りではクモヘリカメムシの発生地点割合が高くなっています。
- (3) カメムシ類は周辺の樹上や落ち葉の中、土手や畦畔の雑草などで成虫態で越冬しているか、カスミカメ類等は卵で越冬しています。越冬後は、水田周辺の雑草に移動してきます。水田周辺の雑草を早くから刈り取っておけばカメムシ類の生息数を少なくすることができます。
- (4) 出穂前に畦畔雑草でのカメムシ類の生息数を少なくすることで、出穂後の水田への侵入数を少なくすることができます。しかし、出穂直前に畦畔除草すると、かえってカメムシ類を水田に追い込むことになるので、畦畔除草は**出穂10日前まで**に終わらせましょう（7月29日付病害虫防除情報（斑点米カメムシ類））。
- (5) イネ科雑草のみならずイヌホタルイ等のカヤツリグサ科雑草の穂も、主要種であるアカスジカスミカメの産卵場所となるため、水田内の除草管理も徹底してください。

（出穂期以降）

- (1) カメムシ類は、水稻が出穂すると水田に侵入するため、出穂の早い水田に被害が集中します。早生品種や移植時期の早いほ場では、カメムシ類の侵入や発生に注意し、出穂期以降に水田内でカメムシ類の発生が認められた場合は薬剤防除を行いましょ。防除の目安は、乳熟期（出穂期の7～10日後）の水田内すくい取り（20回振り）で2～4頭です。
- (2) 散布剤による防除は、**乳熟期を基本とし、その後も発生が見られる場合は7日後に追加防除**を行いましょ。
- (3) 水面施用剤を使用する場合は、穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、7日以上、止水してください。その後多発が予想される場合は、散布剤により追加防除を行いましょ。
- (4) 大型のクモヘリカメムシ等は水面施用剤の防除効果が劣ることがあるので、液剤や粉剤を使用しましょ。
- (5) 使用薬剤については7月29日付病害虫防除情報（斑点米カメムシ類）表1を参照してください。

6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

- (1) 第2世代成虫は7月中旬ごろに発蛾盛期となり、イネに産卵します。第2世代幼虫は8月上旬から9月にイネの葉を綴ってツトを作りその中で蛹になります。
- (2) 発生が多いとほ場の多くの止葉にツトを作るため、穂の充実が悪くなり、品質も低下します。
- (3) 遅く移植したほ場や直は栽培など8月中旬以降に出穂するほ場では被害が多くなります。また、窒素肥料を多く施して葉色が濃いほ場でも被害が多くなりやすいです。
- (4) 防除は、幼虫がまだ小さい8月上中旬に行いましょ。中齢以上になるとツトが大きくなって薬剤がかかりにくくなります。

表3 イネツトムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1 B	収穫21日前	1,000倍	2回
MR. ジョーカー粉剤DL	シラフルオフェン	3 A	収穫7日前	4 kg	2回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)
- ・シラフルオフェンを含む農薬の総使用回数：2回以内

7 ニカメイチュウ (第2世代)

- (1) 第2世代成虫は、7月6半旬から8月1半旬頃に発蛾最盛期になります。
- (2) 第2世代幼虫の被害は出穂後に白穂となるため、被害が多いと収量に影響します。
- (3) 防除は、散布剤を発蛾最盛期の7日後までに株元にもよく付着するように散布します。水面施用剤は発蛾最盛期に湛水状態で施用し、その後7日間は落水やかけ流しをしないでください。

表4 ニカメイチュウの防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
水面施用剤	バダン粒剤4	カルタップ	14	収穫30日前	3～4 kg	6回
散布剤	スミチオン粉剤3DL	MEP	1B	収穫21日前	3～4 kg	2回 (但し出穂前は1回)
	スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前	800～1,000倍	2回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・カルタップを含む農薬の総使用回数：6回以内 (浸種前は1回以内、浸種後から移植時までの処理は1回以内)
- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)

8 セジロウカ

- (1) 7月頃に成虫が本田に飛来します。飛来成虫からふ化した幼虫は7月下旬～8月中旬に発生盛期になります。
- (2) 出穂期頃に幼虫の発生が多いと穂を吸汁加害するので穂が褐変し、排泄物に発生したスズで穂が汚れ、千粒重の減少や品質の低下をもたらします。
- (3) 株当たり幼虫が5～15頭になったら防除しましょう。

表5 セジロウカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫7日前	2,000倍	5回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回

9 ツマグロヨコバイ

- (1) 本虫は、年4回発生しますが、出穂期から乳熟期に発生した幼虫による吸汁被害が減収に影響します。
- (2) 発生が多いと上位葉や穂について吸汁し、葉先が赤黄色に変わってきます。排泄物にすす病菌が多発し、イナ体がすすで黒くなってきます。
- (3) 成虫と老齢幼虫が株当たり10頭以上で5%減収になるので、出穂期頃にこの密度以上の場合は防除しましょう。

表6 ツマグロヨコバイの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫7日前	2,000倍	5回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回